

第1章 近世ベトナムにおける本草・博物書と植物資源 ——近世日本との比較の視点から——

岡田雅志
防衛大学校

1 はじめに

本章では、前近代のベトナムにおける植物資源情報を記した文献史料としての本草書と博物書に注目し、日本の事例と比較しながら、その特徴を明らかにしようとするものである。ベトナムの本草書については、ベトナム医学史の中で言及されることはあっても、生物資源に対する知識の集成としてのアプローチはなかったように思われる¹⁾。他方、東アジアにおいては、特に日本において顕著に見られるように、本草学と博物学は密接に結びついて発展し、その成果は近代植物学・博物学に継承されていったことがしばしば指摘される。日本博物学史の泰斗上野益三は、日本では古来より動植物がある程度識別され、名が与えられることがあったが、その体系化は中国から伝来した薬の知識体系である本草に学び、中国の本草学がしだいに博物学的内容を増加させ、特に博物学的思考により書かれた李時珍の『本草綱目』が江戸時代の日本に紹介されたことが、日本の博物学の発達に大きな役割を果たしたとしている。『本草綱目』は、薬用となる動植物及び鉱物資源を16部60類に分類して立条し、各条の集解に、動植物等資源の形状や産地等を記述しており、この部分の記述が日本

1) ベトナム伝統医薬の古典とされる『南薬神効』と中国の『本草綱目』を比較した板垣(2008)や東アジア医学史の立場からベトナム医学の特徴を考察した真柳(2010)などの日本の研究のほか、ベトナム伝統医学の形成過程を詳述するLê Trần Đức(1990)などのベトナム国内の研究や、中国本草学の影響に注目する中国にも多くの研究がある。加えて、小田(2011, 2016)やMonnais et al.(2012)など、近現代における「伝統医学」あるいは「民族医学」の創出に注目する研究においては、『南薬神効』が「古典化」される過程について論じられている。小田は、西洋医学に対抗するものとして近代に創出された伝統医学という概念に対して、植民地支配からの独立後の国家建設において国民統合のために民族医学として再編されていったとする。本章においては双方を包含してベトナム伝統医学(現在一般に用いられるベトナム語 Y học cổ truyền (古伝医学) に対応)の語を用いる。

の本草研究者たちの博物学的好学心を誘発したのだという（上野 1971）。

ただし、日本において博物学が発展した背景は、以上のような中国本草学からの思想的影響だけではない。上野は、薬舗にある生薬の母体である植物や動物を明らかにし、真贋の鑑別法、国産の有無などをもっとよく知りたいという実用上の必要からはじまり、それがやがて広く産物に目を開き、興味をもつようになり、博物学へとつながっていったとしているが、こうした状況は、当時の薬用資源の流通のあり方とも大きく関わっているはずである。日本で独自の本草学・博物学が本格的に発展するのは18世紀以降のことであるが、当時は、幕府による貿易制限や中国市場の拡大などにより、薬材となる生物資源の安定的な輸入が困難となり、それに伴い粗悪品も多く流通するようになった。それゆえ、それら資源に関する正確な情報が必要とされたのである。日本の本草書の特徴の一つとして商品流通に関わる内容が多いのにはこうした背景があると考えられる（岡田 2020）。つまり、資源に関する知識が体系化されるにあたっては、当時の人々の資源に対する認識に影響を与えたと考えられる資源の流通状況も考慮する必要があるということである。本章では、このような問題意識に立った上で、ベトナムの本草書、博物書を紹介し、そこに薬用植物資源の情報がどのように描かれているかについて分析する。さらに日本との比較を通して、ベトナムにおける薬用植物資源についての認識のあり方について考察してゆきたい。

2 ベトナムの伝統医学と本草書

本節では、ベトナムの代表的な本草書とそれに関連する伝統医学の歴史について説明する。ベトナムの伝統医学の歴史は、10世紀に中国から独立し、独自の王朝を建てた以後の歴史と関連付けられて語られることが多い。例えば、李朝国師の呼称で知られる阮明空（1065or66-1141）は、1136年に李朝皇帝神宗の難病を治した功績で国師となったことが『大越史記全書』に記録されている。同時に、多くの民衆も救ったとされ、ベトナム伝統医薬の祖とみなされることもある。しかし、ベトナム独自の伝統医学を確立したとされるのは李朝に続く陳朝期の人物とされる慧靖（静）である。伝えられるところによれば、慧靖は、1330年に諒江府多錦県（現ハイズオン省）に生まれ、幼くして両親を亡くし、近隣の寺で養育された。そこで学問とともに医薬を学び住民の病の治療にあたり、22才で科挙（郷貢）に合格したが、仕官せず、紅河デルタの寺を渡り歩き、修行を続けながら各地の住民の治療を行い、その名が知られることになった。当時、中国の明の皇帝が天下の才ある者を召集する命を出し、陳朝はそれに応じて、慧靖を含む一団を朝貢使節に随行させたところ、才能を認められた慧靖は帰国を許されず明朝の太医院の医官となり、そのまま客死したのだという（Lê Trần Đức 1990; Thompson 2017）。

以上のような、慧靖の事跡は、同時代の史料に記されているものではないが、

阮明空と慧靖のいずれも禅僧であるという点が興味深い。仏教（というよりは宗教全般）と医療との関係は深く、大木（2002）は、ボロボドゥール寺院の壁画に描かれた薬品から、現地社会に外来の仏教が普及した大きな理由の一つに宗教とともにもたらされる高度な医療知識の存在をあげている。仏教はその教義だけではなく、土木、天文などとともに医療の知識・技術を背景として多くの地域で信仰を獲得していったのである。この時期のベトナムにおいて、高度な医療の担い手が禅僧であったことは、中世の日本において、禅僧が留学によって中国の最新医学を学び、禅寺が医学知のセンターとなっていたことを想起させる。

慧靖に話を戻せば、彼は、中国滞在中に、中国の医薬（北薬）だけでなく、ベトナム人にあった医療を提供したいと考え、『南薬神效』を含む多くの医学書を著わしたとされる。彼の言葉とされている「南薬が南人を治す」には、ベトナムの気候に合った医薬としての南薬というだけでなく、北薬を利用できない一般のベトナムの人々が身近な薬材で治療できるようにとの願いが込められていると説明される。中国で客死したとされる慧靖であるが、生前に祖国に著書を送ったため、これらの著作が現在まで伝わることになったのだという²⁾。この『南薬神效』は、現在にいたるまで、ベトナム伝統医学の古典とされているが、慧靖が本当に陳朝期に実在した人物であったのかという点を含め、由来がはっきりしない部分が多い³⁾。慧靖の著作について、版本の年代がはっきりしている最古のものは、1717（永盛3）年の『洪義覚斯医書』全2巻で、その序によれば、当時黎朝の実権を握り、王府を開いて政治を行っていた鄭氏（鄭王）のところに、慧靖の著作をまとめた『南薬正本』と題された木版本が進呈されたが、刻版に誤りが多いと見た鄭王は侍内府の官に校訂を、さらに医院の官に追補を命じてあらためて『洪義覚斯医書』の名で刊行させたのだという（Trần

2) 真柳（2010）は、慧靖の著作がベトナムに伝存していることをもって、中国に赴く前に書かれたとする。また、レー・チャン・ドゥックは永楽帝のベトナム遠征の際に多くの医薬書を含む書物が持ち帰られたために、一部の著作が名前のみが伝わる佚書となったとしている（Lê Trần Đức 1990）。

3) チャン・ヴァン・ザップは陳朝の登科録（科挙の合格者リスト）に慧靖の本名である阮伯靖の名がないこと、慧靖の手になる『禅宗課虚語録』（陳太宗の『課虚録』の解説書）の序に徳隆3（1631）年の紀年があることから、1710年に進士に合格した記録のある阮国靖という人物が慧靖ではないかと推定しているが（Trần Văn Giáp 1984: 420-421）、『禅宗課虚語録』を著わした年から科挙合格年までが開き過ぎており無理があるだろう。また、その後、17世紀末に清朝に使節として赴いた阮名儒が刻ませたという碑文（道中に偶然慧靖の墓を発見し、墓碑に刻まれた遺言に従って遺骨を持ち帰ろうとしたが、清朝皇帝に許可されず、遺言を書写して帰国後、遺言を石碑に刻ませたというもの）や、阮伯靖の名を載せる登科録（後代の編纂）の発見などにより、上述の事績は事実との見解が広まっているが、いずれも同時代史料ではないため、確かなところはわからない。ただ、18世紀の段階で慧靖が伝説的名医として広く知られる存在であったことは間違いないといえるだろう。

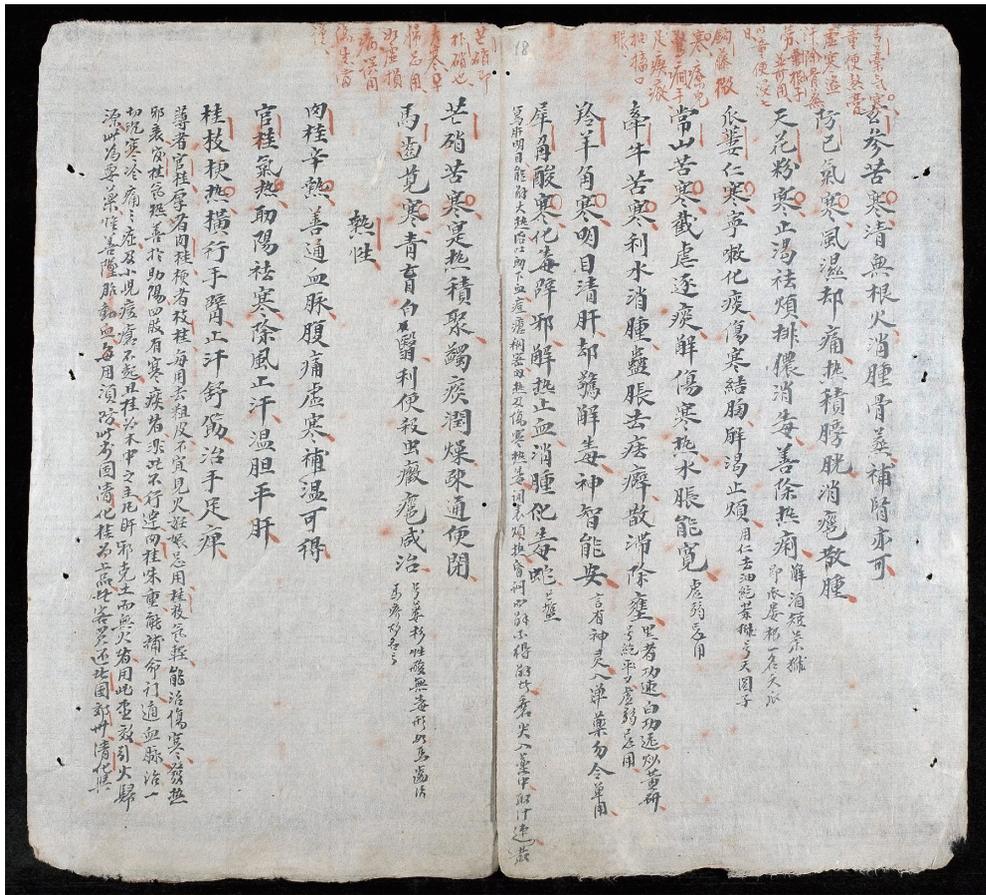


図1 「直解指南性藥賦」(ベトナム、ハノイ国家図書館蔵本、R. 1895)

Văn Giáp 1984: 420-421)。その上巻には、「南薬国語賦」「直解指南薬性賦」という本草書が収められている。「南薬国語賦」は国語(チュノムで表記されたベトナム語)で南薬の漢名・国語名・効果を、「直解指南薬性賦」は治法毎に280の薬味を、いずれも賦(韻文)の形式で記したもので、現伝する最古の南薬本草書ということになる(真柳 2010)。この中に『南薬神效』は含まれていないが、『南薬神效』の最古の版本は、洪福寺の禅僧により編纂され、1761年に再刻したものだという(Lê Trần Đức 1990)⁴⁾。『南薬神效』は全11巻の医学全書であるが、首巻の「薬品南名気味正治歌括」に、22部に分類された499種の漢名・国語名・気味・薬性・(一部の)製造法が記載され、そこに名称のみを列挙する本草拾遺63種が附された本草書的内容となっている。分類の詳細は、以下の通り、原草部62種、藤草部17種、水草部6種、穀部19種、菜部46種、菓部48種、木部43種、虫部32種、鱗部8種、魚部35種、甲部6種、介部13種、山禽部39種、水鳥部12種、六畜部26種、野獣部36種、水部9種⁵⁾、土部14種、金部11種、石部7種、鹹部4種、人部6種である。五行思想に基づく排列順こそ踏襲していないものの、この分類には、薬材を自然物としての形質的特徴に従い60類に分類した『本草綱目』の影響が強く看取される⁶⁾。

4) 現伝する諸本については真柳(2021)に詳しい。

5) ハノイ国家図書館蔵の2種の版本(R18, R192)のいずれも、目録では水部10種と記されているが、本文(R18本は首巻の本文自体が欠落)には9種しか記載がない。

6) 中国本草書の分類については、当初、『神農本草』の上・中・下の三品分類であっ

言うまでもなく『本草綱目』が刊行されたのは、1596年で慧靖が生きたとされる時代より200年ほど後のことになる。

以上のように、慧靖の事跡には謎に包まれている部分が多く、慧靖の筆とされる著作にも、後世の改変・付加が相当含まれると考えられ、中には、慧靖の名に仮託された書もある。唯一確かなことは、現伝する主要な版本は18世紀に由来するという点である。

その18世紀には、もう一人、ベトナム伝統医学の歴史を語る上で欠かせない人物が輩出されている。それが海上懶翁の号あるいは懶翁で知られる黎有卓(1724-1791)である。彼の事跡については、彼の著作をまとめた『医宗心領』首巻にある自序や『上京記事』、一族の家譜(『文舎黎族世譜』)などいくつかの史料が存在し、詳細を知ることができる。当時の医学や知識人の置かれた状況を示す上でも興味深い内容を含むため、やや冗長となるが以下に、『医宗心領』自序を中心にまとめた小伝を記す⁷⁾。

黎有卓は、上洪府唐豪県遼舎社(現フンイエン省)の進士の家の七男として生まれ(実際に生まれたのは母の郷里の香山県(現ハティン省))、幼い頃から父に従ってハノイで学問を修めた。しかし、20歳の時に父が亡くなり母の世話するため郷里に帰ることになり、また、当時各地で兵乱が起きたため、学問の道をあきらめた。その後、懐安県鄧舎社(現ハノイ市ザーラム県)の武先生(名は不明)に出会って陰陽の術(兵学)を学び、剣をとって武官の道で世の役に立とうとした。武先生は郷試に及第するも仕官をせず郷里で隠遁生活を送っていた人物である。しかし、その矢先に兵乱も治まり、空しさを感じていた。そのような折に母の面倒をみていた五兄の訃報に接し、母方の郷里香山県に戻ることになった。男子として身が立てられないことに思い悩んで衰弱してしまったため、当地の名医として知られた城山の陳誥を訪ねて治療を受けることとなった。陳誥は清漳県忠勤社(現ゲン省)の人で、博學で文章に秀でていた

たのが、次いで5世紀末の陶弘景『本草経集注』から、玉石・草木・獸禽・虫魚・果穀菜などの自然分類が併用されるようになり、『本草綱目』において自然分類に統一された(渡邊1953;真柳1989)。『本草綱目』凡例には、排列について、水・火は万物の先であるため、最初に置き、万物の母である土をその次として、土に従属する金と石を次に置く。続けて植物については、草・穀・菜・果・木と、小さなものから大きなものに排列し、草木から生まれる服・器を次に置き、最後に、動物は蟲・鱗・介・禽・獸、最後に人と、下等なものから上等に排列するという方針を示している(「今各列為部、首以水・火、次之以土・水・火為萬物之先、土為萬物母也。次之以金・石、從土也。次之以草・穀・菜・果・木、從微至巨也。次之以服・器、從草・木也。次之以蟲・鱗・介・禽・獸、終之以人、從賤至貴也。」)。こうした植物と動物の排列は『南薬神效』においても概ね踏襲されているといえる。なお、日本の本草書の多くは、『本草綱目』の分類に極めて忠実である。

7) 家譜については実見できていないため、Trần Văn Giáp (1984: 427-429) に引かれた内容を参考にした。また真柳(2010: 69-70)、Phó Đức Thảo (2005) も適宜参考にした。

が郷試に合格することができず城山で医学の道で身を立てることとした人物である。1年余りの治療期間の後、黎有卓は陳読の家にあった『錦囊秘録』（馮兆張による全8書50巻の医学全書、1702年刊行）を一日読んで医学における陰陽易理の真理を理解したために、驚いた陳読が自分の学問を黎有卓に授けようとした。それを果たす時間はなかったが、黎有卓は、陳読と話をすることで彼の秘説について得たことは多かった。その頃、この地にも兵乱が迫っており、討伐軍の将軍に協力を要請されたが、老親を放っておけないことを理由に固辞し、香山に戻り、医学の道を志すこととなった。近隣の陳医師（陳読とは別）に時々話を聞いた以外は、百家の書を求め、書物と格闘し自力で勉学に励んだ。2、3年後にようやくものになってきたが同時に医学の奥深さに独学の限界を感じた黎有卓は、1756年ハノイに上京し師を求めた。しかし、学識の高い師に学ぶ機会を得られず、郷里に戻り、再び書物により医学を学ぶ日々を送った。その後、臨床も多く積み、多くの人々の病を治し、ゲアン・ハティン地方で名医として知られるようになった黎有卓は、自身の医方を伝えるため著述活動にも励み1770年に『医宗心領』を完成させた（自序はこの時のもの）。その後、彼の名声は都にも及び、1780年には、鄭王から招聘され治療を行うこととなった。王府を辞去して郷里に帰った後は、著述活動を続け、『医宗心領』の追補を行い、1780年のハノイ上京時の経験を『上京記事』にまとめるなどした。その後、黎朝が滅びベトナム北中部の支配者が西山（タイソン）朝に移ってまもない1791年に生涯を閉じた。

以上の事跡に見る通り、彼は市井の医家であったにもかかわらず、その著作をまとめた医学全書『医宗心領』は28集66巻と非常に浩瀚である。真柳(2020)は、ここにベトナム化した医薬学が集大成されており、黎有卓はベトナム史上最大の医家であると評している。その高度、広範な内容ゆえに、現在の伝統医学実践に対する影響は『南薬神效』ほど大きくないようであるが、ベトナムにおいても、黎有卓はベトナムの医聖と呼ばれ、真柳と同様の評価がなされている。また、『医宗心領』では、事跡にも登場する『錦囊秘録』をはじめ、『景岳全書』『医学入門』など明清期の医学書が縦横に引用される一方で、「経験」「南薬」といった自国を強調する部分があり⁸⁾、また、ベトナムに中国の医薬書が言うところの傷寒病はないので麻黄・桂枝による強い発汗治療は不可とするなど中国の医方にこだわらない独自の医方が提唱されている（真柳 2010; 2020）。本草

8) 『医宗心領』における自国の表現としては、後述の「嶺南本草」という書名にも見られるように「嶺南」「我が嶺南」という表現が使われることが多いことが興味深い。「嶺南」は南中国の両広地方を含む地域概念であり、前近代のベトナムにおいては、大越という国家の領域を越えて、古代の百越につらなる広義の「越人」のアイデンティティを示す言葉でもある。ちょうど黎有卓が生きた18世紀は「嶺南」が示す広域アイデンティティと北部ベトナムに限定したアイデンティティがせめぎあう時代である（cf. 桃木 2016）。気候・風土が似ている両広地方の医学（中国でいう嶺南医学）の影響がある可能性も含めて、「嶺南」が意味するところは、今後検討されるべきであろう。

については、『医宗心領』巻10・11「薬品彙要集」が150種の本草の薬性を記し、巻12・13「嶺南本草」の巻12には前述の『南薬神效』『薬品南名気味正治歌括』がほぼ同じ内容で収載され、巻13では165種の薬性が国語の韻文形式で記されるとともに巻末に140種の名前（漢字・国語名）を列挙した本草拾遺が附されている。

『医宗心領』の現伝している版本は、著者存命時のものではなく、1866年に武春軒が散逸していた『医宗心領』の諸本を収集して再編し（武春軒の序文には黎有卓の母方郷里の香山区に住む五代目の子孫から正本の提供を受けたことなど収集過程が記されている）、1885年に同人寺蔵版として刊行されたものである⁹⁾。従って、慧靖の著作同様、改変、追補が加わっている可能性があるが、慧靖の場合に比べて、著者の活動時期から刊行までの間隔が比較的小さいことなどを考えれば大幅な改変の可能性は低いといえるだろう。真柳（2010）は、全内容は高レベルで首尾一貫しており、黎有卓の筆によるものと考えられるが、上記の「嶺南本草」については、別人の著述が混入したものの可能性が高いとしている。

3 ベトナムの博物書

次に博物書についてみておく。ベトナムの博物学、博物書についての専門的な歴史研究は管見のかぎり見当たらないが、もとより、博物学は東アジアの伝統的学問分類にはない概念でもあり当然かもしれない。その上で、自然界に存在する事物に関してまとまって記述された書物という意味でいえば、黎貴惇（1726-1784）の『芸臺類語』がその嚆矢と考えられる。ベトナムの漢文・チュノム古典籍の文献学研究の基礎を築いたチャン・ヴァン・ザップは、『芸臺類語』について、「目録学の用語では「類書」というのが、一つの専門分野についてではなく総合的な内容を含んだ書物にあたり、もし、現代的な述語を使うのならば、百科全書に属する書物といえることができるだろう。しかし、中国やベトナムの書物編纂、考究の伝統においては、こうした百科全書にあたる書物（類書）は西洋諸国の百科全書のように文字の配列によって並べられるのではなく、複数の書物を、その内容によってテーマ毎に分類したものであるのが普通である。その意味において、『芸臺類語』は、黎貴惇という一人の人物によって編纂された百科全書といえることができる」と述べ、それまでの学問の伝統の枠に収まらない書物の登場を説明している（Trần Văn Giáp 1990: 257）。著者の黎貴惇は、ベトナムを代表する歴史上の知識人の一人であり、『芸臺類語』の他にも『大越通史』などの歴史書、史論書『群書考辨』、経書の注釈書、詩集と多岐にわたる書を残している。また官僚としてもハノイの黎朝（実質的には鄭氏王府）に仕え活躍した人物である。

9) 版本の現状を含め真柳（2021）に詳しい。



図2 『南方名物備考』(ベトナム、ハノイ国家図書館蔵本、R.44)

『芸臺類語』はテーマ毎に巻が分けられ、理気、形象、区字、典彙、文藝、音字、書籍、仕規、品物の9巻からなる。301種もの中国典籍が引用されており、黎貴惇の該博な知識とともに、孫引きが多く含まれているとは思われるが、当時のベトナム知識人の間で、中国の書籍が相当数流通し、思想的に影響を与えていたことが窺える(覃 2017)。この内の第9巻品物において、316条に及び動植物、鉱物など自然界の諸物について取り上げられており、まさにここでいう博物書にあたる内容といえる。特に分類されることなく、自然物だけではなく、衣服などの器物も多く含まれる。

時代は下るが、もう一点ベトナムの博物書としてあげるべきなのは、1901年に刊行された『南方名物備考』である。著者の鄧春榜(1828-1910)は、主に阮朝嗣徳期に活躍した儒家官僚で、ナムディン省春場府行善社の出身。1856年、28才で進士に合格し、博学で、特に天文、医学、薬草について造詣が深かったとされる。事物の項目が未分立である『芸臺類語』と異なり、『南方名物備考』巻上に天文・地理・歳時・身体・疾病・人事・人倫・人品・職制・飲食・服用・居処、巻下に宮室・舟車・器用・礼楽・兵刑・戸工・農桑・漁獵・巧藝・五穀・蔬菜・花・果・草・木・竹・禽・獸・鱗・介・昆虫の各門の分類の下、漢名で立てられた項目に、その事物の国語名と簡潔な説明が付される形となっている。五穀以下の部分がいわゆる博物学的内容となっている。この分類に本草書の分類の影響が強く見られる点は注目される。鄧春榜の自序には、物の名義を説明した書として、『爾雅』、『急就』(漢代の漢字学習書)、『詩疏』、『南方草木状』、『本

草綱目』、明・王象晋『群芳譜』、『説文解字』、『正字通』、『通俗文』、『格致鏡原』、『三才図会』、『埤雅』を挙げ、南北の事物の名前を同定することの困難さを述べた上で、南北事名を明らかにすることを試みた先達として黎貴惇の『芸臺類語』、慧靖の『薬性指南』（「南薬国語賦」のことか）、范廷琥の『日用常談』¹⁰⁾を挙げている。そして、本書を著したのは、それらの不足を補い、誤りを訂正して広く世に供するためであるとしている。

4 ベトナムの本草・博物書中の植物資源

本節では、試みに肉桂、縮砂、人参の3つの薬材を例としてとりあげる。肉桂、縮砂はベトナムの産物として古くより知られたもので、人参は主に輸入に頼っていた外来植物資源である（後述する通り、18世紀までに国内でも栽培されるようになっていた）。これらの薬材について、以上に紹介してきたベトナムの本草書、博物書中の記事を対照させたものが章末の〔付表〕である。以下、その内容に見られる特徴等について略述する。

〔本草書〕

本草書には、薬性に関する情報がほとんどで、形状・産地などの植物そのものに関する情報はほぼないことが指摘できる。唯一の例外が、「直解指南性薬賦（性薬歌）」の肉桂の項目で、双行注において詳しい薬性を述べた最後の部分に「本国（ベトナム）の清化（タインホア）が上級品とされ、中国商人が中国側の隣接する地方に持ち帰ると、上党（中国の本草書諸本で最上級の人参の産地とされる山西省の地名）の人参と同じ価格になる」（〔付表〕下線部）との記述がある。ベトナムの肉桂の名声は、『水経注』をはじめ古くより中国の文献に記録されているが、中国商人が清化の肉桂を大量に買い付ける現象が史料に現れるのは18世紀以降のことであるため（岡田 2020）、この部分の記述は18世紀に『洪義覚斯医書』が刊行された際に付加された可能性が高いと思われる。いずれにせよ、こうした記述は極めて例外的であり、本表に取り上げた3種の薬材以外の部分を見ても、稀に産地に関する記述が見られる程度である。

〔博物書〕

『芸臺類語』では、肉桂に関して独立した記述はなく、香物（香料）について述べた条において、沈香などとともに取り上げられ、これらは南徼（南方）で産出されることが記されるのみである。縮砂については、簡単な記述ではあるが、産地（太原鎮、現ターイグエン、バクカン省）が記されている。目を引くのは、人参に関する非常に詳細な記述である。黎貴惇は、ここで、中国典籍にみる人参の歴史に始まり、ゲアン地方の国産の人参の加工法や品質などについて

10) 范廷琥（1768-1839）によって編纂された語彙集。天文に始まる32の門に分類された漢語について対応する国語を示す。最後の4つの門が草木、禽獸、水族、虫類となっている。

て述べ、権貴の士が国産の数倍の値をつける中国商人がもたらす人参（北参）をこぞって購入する状況を嘆いている。さらに、品質のよい産物は、天地の気が集まる東方、南方の瀕海の山地に産出するのであり、それゆえ、極東の遼東・高麗・新羅で良質の人参ができるのと同じように、極南にあたるベトナム中部においても、沈香・速香・檀香・桂など海外の商船が求めるような高品質のものを産出するのであるから、品質の高い人参が採れるはずである、と述べている（表下線部）。このように、黎貴惇は、天地気脈の思想に基づきつつ、ベトナムの物産の豊かさを強調している。ベトナムにおける国産人参の生産がいつから始まったのかは今のところ明らかではないが、東アジアにおける「人参ブーム」はベトナムにも及んでおり、本書辻論文で取り上げられる日本の事例と同様に、ベトナムでも国産化が進んでいたことは興味深い。他方、19世紀末に書かれた『南方名物備考』には、人参の項目はない。片倉（2006）が明らかにしているように、19世紀の阮朝下においても人参は珍重され、南参とも呼ばれる国産人参の栽培は盛んであったようであるが、中国に人参を逆輸出するまでにいたった日本とは異なり、黎貴惇の述べるような中国からもたらされる人参に対する信仰が根強かったためか、北参と南参の価値認識の差は埋まらなかったようである。それゆえ、著者の鄧春榜は、人参をベトナムの物産として採用しなかったのかもしれない。また、前述のように本草書を意識した分類が行われている『南方名物備考』の記述内容は、極めて簡略ではあるが、中国本草書を意識しているように見える。

5 東アジアの本草・博物学におけるベトナムの本草・博物書の位置づけ

以上でみたようなベトナムの本草書・博物書は、東アジアの本草・博物学において、またとりわけ日本と比較した場合に、どのように特徴づけられるであろうか。まずは肉桂を事例に各地域の代表的本草書の記載と比較してみる。とりあげたのは、主に18世紀後半に活躍した、日本を代表する本草家小野蘭山（1729-1810）の『本草綱目』についての講義録である『本草綱目啓蒙』（以下、『啓蒙』）、李時珍の『本草綱目』、そして1613年に朝鮮で刊行され、ベトナムを含む東アジアで広く知られた医学全書『東医宝鑑』の内、本草について記した「湯液篇」である（章末、資料1～3）。

まず形式的な面を見ると、中国の『本草綱目』は、積名（異名とその典拠）・集解（産地、形状、性質、採取時期、良否など）・正誤（諸説の誤謬の訂正）・修治（薬材の調製、使用部分の選び方）・気味（酸鹹甘苦辛の五味、寒熱温涼の四気、毒性の有無）・主治（効能）・發明（効能・用方等に関する李時珍の独自の知見）・附方（処方）の項目を立てている。このような内容分類も李時珍の發明とされ、『本草綱目』が実用書として広く普及した理由の一つとされる（渡邊1953）。日本の『啓蒙』は、積名、本文に続いて集解が付される構成をとっているが、本文の内容

も、ほぼ『本草綱目』における集解の内容となっている。その成立時期から『本草綱目』の直接的影響を受けていない朝鮮の『東医宝鑑』は、項目名を立てていないが、おおよそ名称・気味・主治・修治・集解の順序で記載している。これらに対し、ベトナムの本草書は、やはり項目を立てず、内容については、名称の他は気味・主治・修治といった薬性に関する記述が中心で、集解にあたる内容は基本的に含まれないことはすでに見たとおりである。このようにみると、『啓蒙』は、『本草綱目』が分類の最初に持ってきた集解の部分のみに関心を向け、逆に薬性に関する内容は落としていることが特徴的である。そもそも、『本草綱目』の百病主治薬という総論部分も一切取り上げられていない。集解部分の記述内容を見比べても、『啓蒙』が、商品としての肉桂に関する具体的記述（産地毎の流通状況、品質の変遷など）を詳細に記している点が目立つ。『本草綱目』にもこのような記述はほとんどない、

また、冒頭の名称に関する部分に注目すれば、中国の周辺地域の本草書に共通点が見られる。それは、自国の植物資源と中国の本草書等に出てくる漢名との関係についての考察が行われている点である。ベトナムの本草書において国語名がまず記されるように、『啓蒙』でも、まず、和名が記される。肉桂については、日本に自生していないため、ニッケイノキというあらたな和名が充てられ、桂の漢字が充てられてきたカツラノキとは異なることがまず述べられている。江戸時代に輸入が急増した肉桂については、『本草綱目』中の薬材名を抜き出し和名（訓）を充てた林羅山の『多識編』に始まり、中国の本草書に記される、牡桂、菌桂、桂心などが何を指すかについて百家争鳴の議論が繰り広げられ、本草書における記述も時代を追う毎に長くなる傾向があった¹¹⁾。日本にも自生する植物については、『啓蒙』は、地方毎の呼び名などを数多く列挙している。これは、将軍吉宗の時代の薬種国産化政策以降、各地に採薬使が派遣され、輸入薬材の自生の有無や代替品種についての調査が進められ、情報が集積されたためであろう。蘭山自身も幕府の医学館に仕官してからは多くの採薬行に従事している。『東医宝鑑』の場合も、朝鮮に自生する植物については、ハングルで現地呼称が記されている。ただ、朝鮮半島に自生しない肉桂の項目には、ハングルの記載はなく、代わりに外国（主に中国）から輸入される薬材であることを示すため、匡郭（版面の枠線）の上に「唐」の字を付して明確に区別されている。このように、中国の本草書・医書に基づきその医学体系を受容した周辺地域において、本草書に出てくる漢名が具体的に何を指すかというのは、治療を行う上で極めて重要なプラクティカルな情報であったのである。

ただ、『啓蒙』に見られるような、日本の本草書の植物名の同定へのこだわりについては、治療における現実問題だけでなく、当時の中国学（漢学）の影響も考える必要がある。そこで次に、本草学・博物学に関わる中国の思想的影

11) 中国本草書に見える薬材に和名を充てた最初の書は、918年に醍醐天皇の勅命で編まれた『本草和名』である。同書においては肉桂の和名は記載されていない。

響面を、日本とベトナムとで比較する。

日本の本草学が博物学として発展した背景として指摘されるのが、『詩経』名物学と朱子学の「格物致知」の影響である(西村 1999 など)。「詩経」名物学は、『詩経』所収の詩篇に出てくる植物、昆虫、動物に関して、それらの名称、形状、産地などを考証する学問で、経書解釈の一分野として中国で発展した学問である。林羅山の『多識編』の書名も、明の林兆珂が著した名物学の書名からとったものである。『庶物類纂』を編纂し、日本独自の本草学の基礎を築いたとされる稲生若水(1655-1715)は、新井白石の要請を受けて『詩経小識』を編纂し、『詩経』にでてくる動植物の日本語名、形状などの考証を行っている。若水の門下が松岡恕庵(1668-1746)で、そのさらに門下が小野蘭山であるが、いずれも本草書とともに名物学の書を著している(陳 2020)。

「格物致知」は、聖人の道による治世の方法を説いた『大学』中の句「致知在格物、物格而知至」を、物事の理を窮めることと解釈した宋代の朱子学の中心的思想の一つで、近世東アジアのエリート達に大きな影響を与えた。それが、天の理に通じる自然界の事物・事象の観察的理解を重視する博物学思想の基盤となったというわけである。上の松岡恕庵は、『論語』に出てくる「正名(事物の名を正しくすること)」と格物致知を結びつけ、聖人の学問実践として本草の研究を行った(cf. 西村 1999; 松岡 2012)。松岡恕庵に代表されるように、日本の本草学は儒者の営為として展開した側面が強いのである。これは、おそらく、本草学にかぎらず、江戸期の医学一般にも言えることである。幕府の医官から、町医者、村医者にいたるまで、広い意味での中国学(漢学)の一環として医学・本草を学んだのであり、その中で朱子学を中心とする儒学思想が存在していた¹²⁾。つまりは、中世の僧医の時代から、儒医の時代への転換の中で本草学も発展していったといえる。

このような近世における朱子学を基盤とした中国学の興隆と自然事物への関心の増加は、実はベトナムにおいても共通している。黎貴惇は『芸臺類語』の序において、次のような言葉で筆を起こしている。

古人が格物致知の学と言うのは、思うに、その効果が修齊治平(天下が治まる理想的な状態)に至るといふことであろう。道(古代聖人の治法)は事物にあり、事物には道がある。遠くは気が天に届き、地にわたかまる現象(自然現象)から、近くは、人倫・日用(人々の日常生活)まで、普遍の原理が存在しないものはない。〈中略〉孔子は弟子にこう言っている「お前達は どうして『詩経』を学ばないのか。詩を学ぶことで、人の精神が刺激され、ものの見方が身につき、協調することを学び、ものの哀れを理解できるようになり、近くは父母に仕え、遠くは君主に仕えることも

12) 松岡恕庵自身は医者ではなかったが、本草の知識を得るため、多くの医者が門下に集ったとされる(木村 1991)。

でき、多くの鳥獸草木の名も知ることができる」と。これらはみな、格物のための営為である¹³⁾。

後半の『詩経』を学ぶ効能を述べた部分は、『詩経』名物学の成立に影響を与えた『論語』陽貨篇の一節である。黎貴惇も、松岡恕庵同様、『詩経』名物学やその重要性を近世に高らしめた朱子学の格物致知の影響を受け、それぞれの地において、自らを取り巻く万物を理解しようとしたわけである。『南方名物備考』の鄧春榜による自序においても、格物の理が説かれ、上述のように、『爾雅』、『詩疏』など『詩経』名物学の古典や、『格致鏡原』など格物致知の影響を受けた博物書類的書の系譜に自著を位置づけている。『南方名物備考』の執筆目的であった南北の事物を対照させ、正しい名を与えることは、当時のベトナムの儒家エリートにとって格物致知の重要な思想的営為であったのである。

また、医学が広い意味での中国学の素養の一つとして儒家エリートによって広く学ばれた点も、ベトナムと日本は共通している。現在ベトナムで語られる医学史は、独自の民族伝統医学が慧靖以来、着実に発展してきたように見られるが、近世における医学の主流は明らかに当世の中国医学であり、それを摂取した主体が儒家エリートであった。鄧春榜が医学・本草学に通じていたのは前述の通りであるし、黎朝末期に生まれ、阮朝で国子監祭酒にまでなった范廷琥(1768-1839)は、その著書『雨中隨筆』において医学について論じている。彼は、慧靖のことは一言も触れず、医家の学は炎帝(神農氏)・黄帝に始まるとし、その真髓である鍼灸術が、ベトナムには董仙(士燮の時代に不死の術を持つと言われた中国の仙人董奉)・雛医(陳裕宗に使えた中国出身の医師)によって伝えられたはずであるのに現在に伝わっていないことを嘆き、当世の医家の家伝の医術について、批判を加えている。さらに当時最も影響力のあった『景岳全書』『錦囊秘録』『医学入門』の偏重にも警鐘を鳴らし、『内経』『素問』で説かれる本質を重視すべきと論じている。これは、北(中国)の医学、南(ベトナム)の医学という区分ではなく、ベトナムを含む中華世界の医学という知の基盤の上で、医方が議論されていたことを意味しよう¹⁴⁾。

13) 古人称格物致知之学、推其效至修齊治平、可謂博矣。道在事物、事物有道、遠而際天蟠地、近而人倫日用。莫不有其理焉。〈中略〉孔子曰『小子、何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名』。此皆格物工夫。(『芸臺類語』自序)

14) 真柳(2020)は、中国医学が各地に広まり、各地の風土に適した医学が形成されていた状況を「中国医学の森」で生育した多様な樹木の果実が周辺にもはこばれ、各風土に適応する種子だけ選択的に発芽、あるいは在来種と融合し、ことなる大地の栄養で「ことなる森」を形成した」と述べている。これはまさに近世期の東アジアの医学の特徴を的確に表現していると言える。その背景にあるのは医学だけではない中国学の広まりであり、それを下支えした当時の書籍流通の発展であると考えられる。在野にあって医学を独習し、浩瀚な医学全書を著わすことができた黎有卓の存在がその証左である。

黎有卓についても同じことが言える。儒家官僚の家に生まれ、当初儒家エリートの道を歩もうとした黎有卓が学んだのは慧靖の医学ではなく、最新の中国医学であった。すでに見たとおり、彼が最初に学んだのは『錦囊秘録』であり、それに加え『景岳全書』『医学入門』から大きな影響を受けて自らの医学論を構築した(真柳 2020)。言い換えれば、最新の中国医学を究めんとした中で、現地の風土にあった独自の治療を見出したのである。その意味において、黎有卓が「わが嶺南」という言葉を使うとき、それは、南の中華世界ではなく、一つの中華世界の南方地域を意味しているといえる(注8も参照)。黎貴惇が、気の集まる南方(南徽)には中国では取れない多くの資源を産出すると述べるときの南方に近い認識といえるだろう。慧靖の著作とされるものをまとめた『南薬正本』が、鄭王の命によって『洪義覚斯医書』と改題して刊行されたことも同様の理由によると考えることができる。当時の鄭王府は、『洪義覚斯医書』の他にも中国、ベトナムの古今の医方を集成した勅撰の医方書『万方集驗』を刊行している(真柳 2010)。つまり、北の中華に対抗する独自の価値が模索されたというよりは、中華の価値観を極限まで内面化するなかで、独自性が見出された時代であったのである。

以上のように、思想的背景については、日本とベトナムとの間で大きく異なることがなかった、むしろ、同時代の東アジアに存在していた思想潮流を強く共有していたといえる。それでは、どうして、ベトナムにおいては、日本のように本草学の博物学的発展が見られなかったのであろうか。その理由は、両国の薬材に対する認識の違いにあるのではないかと考える。日本の本草書は、『本草綱目』の物産としての薬材に関する情報が肥大化させていったのに対し、ベトナムの本草書は薬性に関する情報が大部分である¹⁵⁾。仮説的ではあるが、こうした違いは、歴史的に薬材の供給元の地域であったか、供給先の地域であったかという点が大きく関係するのではないだろうか。日本においては、古来より中国本草書に記述される薬材の多くは海外よりもたらされるものであった。そのため、外来の薬材で適切な効能を得るために、薬材の基原を明らかにし、真贋を見分ける知識が必要とされた。また、異国の貴重な物産という認識があったために、流通状況を含めた情報を詳細に記録することに大きな意味が見出されたのではないだろうか。そうした認識は、18世紀以降、薬材の入手が困難になっていく中で、さらに強化されていった。このような異国文物としての植物資源に対する特別な認識があればこそ、格物致知の影響を受けた儒家エリート達の知的好奇心も刺激されたのだと考えられる。薬品会の開催や大名達の博物趣味、植物絵図など、植物資源が関わる広範な文化活動の発展がそのことを物語っていよう。そして、当初は異国の資源に向けられていた関心が、代替資源として価値を見出された国内資源にも向けられていくことになった。こうし

15) 日本においても香川修徳(1683-1755)の『一本堂薬選』のように、薬性について詳論する本草書も多く存在するが、それらにおいても博物学的情報が多く含まれる。

た状況の中で、日本の本草学は、独自の博物学的学問として展開したのではないかと思われる。

それに対して、ベトナムにおいては、古来より、中国をはじめとする諸国に多くの薬材を供給してきた国であり、中国の本草書に記載のある薬材の多くは国内に自生するものであった。現在では、「南薬」は在来ハーブを加工せずに用いる民間治療薬を主に指すが、本来はベトナムで採れ、使用される薬という意味であり、多くは中国本草書で言及されてきた薬材である。したがって、本草書に記載される薬材はベトナムでは身近なものであり、博物学的情報を詳細に記録する必要性をあまり感じなかったのではないだろうか。このことは、黎貴惇が、南方にシナモンをはじめ貴重な植物資源が多くとれることを誇りながらも、それらについては詳細を述べず、中国から輸入していた人参について詳細に記述しているところからもうかがうことができるだろう。このことが近世のベトナムにおいて、日本のような医学・本草学と博物学的関心との接近が見られず、植物資源に関して博物学な情報を追求し集積されることがなかった原因ではないかと思われる。医学・本草学に関心を持つ近世ベトナムの儒家エリートにとって、重要なのは治療方法、効果であり、物産としての植物については、正しい名（対応する漢語名と国語名）さえわかっていたら十分だったのである。

6 おわりに

以上、ベトナムの本草書と博物書を日本の場合と比較しながら考察を行った。ベトナムの本草書には、博物学的情報が少なく、博物書に本草書の影響は見られるものの、江戸期の日本のような展開は見られなかった。しかし、それは両者の学術レベルや、中国本草学の影響の程度の違いによるものではなく、本草書に求める情報の種類に違いがあったと見るべきである。日本では、マテリアル（あるいはコモディティ）としての薬材に関する情報が重視され、ベトナムは薬としての効果・利用法に関する情報が重視されたのである。そして、そうした違いを生んだ背景には、アジアにおける薬用資源の需給構造があるのではないかと推論した。

ただ、本章においては、一部の本草書、薬材を事例とした比較にとどまり、また、朝鮮との比較も十分には果たせなかった。加えて、博物学に間違いなく大きな影響を与えた西洋思想との交流については論じることができなかった。これらの点については今後の課題としたい。また、今回論じた両国の本草学と博物学の関係、あるいは薬用植物資源に関する情報集積のあり方の違いは、近代以降の植物学や薬用資源学にも影響を与えているはずである。この点についても今後明らかにしていきたい。

参考文献

(日本語・中国語)

- 板垣明美 (2008) 『南薬神効』と民間ハーブ治療—ヴェトナムと日本へ越境した『本草綱目』 板垣明美編『ヴェトナム—変化する医療と儀礼』 春風社。
- 上野益三 (1971) 「本草綱目と日本の博物学」『甲南女子大学研究紀要』7、pp. 153-163。
- 大木昌 (2002) 『病と癒しの文化史—東南アジアの医療と世界観』 山川出版社。
- 太田由佳 (2012) 『松岡恕庵本草学の研究』 思文閣出版。
- 岡田雅志 (2020) 「肉桂と徳川期日本—モノから見るグローバルヒストリー構築へ向けて」 秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで』 大阪大学出版会、pp. 303-329。
- 小田なら (2011) 「ベトナム近現代史における「伝統医学」: 「民族医学」の誕生」『東南アジア—歴史と文化—』40、pp. 126-144。
- 小田なら (2016) 「南ベトナム (ベトナム共和国) における伝統医学の制度化: 華僑・華人との関わりに着目して」『東南アジア研究』53(2)、pp. 217-243。
- 覃鴻敏 (2017) 「《芸台類語》研究」 西南交通大学碩士論文。
- 片倉穰 (2006) 「阮朝の文献にみる高麗人參」『人間科学 (桃山学院大学)』31、pp. 1-19。
- 木村陽二郎 (1991) 「小野蘭山と『本草綱目啓蒙』」 小野蘭山『本草綱目啓蒙 I』 (東洋文庫) 平凡社、pp. 19-44。
- 陳捷 (2020) 「経学註釈と博物学の間—江戸時代の『詩経』名物学について」 陳捷編『医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界』 勉誠出版、pp. 245-264。
- 西村三郎 (1999) 『文明のなかの博物学—西欧と日本』 (上・下) 紀伊國屋書店。
- 真柳誠 (1989) 「中国本草学の科学技術と思想」『生物学史研究』51、pp. 13-16。
- 真柳誠 (2010) 「ベトナム醫學形成の軌跡」 真柳誠編『第2回日中韓医史学会合同シンポジウム論文集 越境する伝統、飛翔する文化—漢字文化圏の医史』 第111回日本医史学会事務局。
- 真柳誠 (2020) 「日中韓越の医書流通と医学体系の形成」 陳捷編『医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界』 勉誠出版、pp. 3-21。
- 真柳誠 (2021) 「ベトナム國家圖書館の古醫籍書誌」 (2021年2月20日取得、<http://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper01/nlv.html>)。
- 桃木至朗 (2016) 「「周辺国」の世界像 ベトナム」 秋田茂他編『ミネルヴァ世界史叢書総論 「世界史」の世界史』 ミネルヴァ書房、pp. 97-106。
- 渡邊幸三 (1953) 「李時珍の本草綱目とその版本」『東洋史研究』12(4)、pp. 333-357。

(英語・ベトナム語)

- Lê Trần Đức (1990) *Lược sử thuốc nam và dược học Tuệ Tĩnh*, Nhà xuất bản Y học.
- Monnais, Laurence C. et. al. (2012) *Southern Medicine for Southern People*, Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.
- Phó Đức Thảo (2005) “Hải Thượng Lãn Ông Lê Hữu Trác và bộ Hải Thượng Y Tông Tâm Lĩnh,” *Hải Thượng Lãn Ông Y Tông Tâm Lĩnh, Quyển I*, Nhà xuất bản Y học.
- Thompson, C. Michele (2017) “Selections from Miraculous Drugs of the South by the Vietnamese Buddhist Monk Physician Tuệ Tĩnh (c1330–c1389),” in C. Pierce Salguero ed. *Buddhism and Medicine, a Sourcebook*, New York: Columbia University Press, pp. 561-568.
- Trần Văn Giáp (1984) *Tìm hiểu kho sách Hán Nôm-Tập 1*, Nxb Văn Hóa.
- Trần Văn Giáp (1990) *Tìm hiểu kho sách Hán Nôm-Tập 2*, Nxb Khoa Học Xã Hội.

【付表】ベトナム本草書・博物書中の薬用植物に関する記述（肉桂・縮砂・人参）

A：「薬品南名気味正治歌括」『南薬神效』（国家図書館蔵本、R. 271）

B：「直解指南性薬賦（性薬歌）」（国家図書館蔵本、R. 1895）

C：「薬品彙要集」『医宗心領』（『新鑄海上醫宗心領全帙』巻10・11、国家図書館蔵本、R. 1129・1131）

D：『芸臺類語』巻9品物（極東学院本、A.141）、E：『南方名物備考』巻2（国家図書館蔵本、R. 44）

冒頭に〈 〉で分類を示した。また、判読できなかった字は■、推定した字は□（四角囲み）で示した。

	肉桂	縮砂（砂仁）	人参
A	<p>〈木部〉</p> <p>桂皮通號、補核桂、大熱辛溫微毒氣、甘溫補虛止痛疼、風昏血注竝麻痺</p> <p>桂支俗號、補梗桂、無毒辛溫、能下氣、發汗開心利肺經、痛風脇痺兼喉閉、一名牡桂、小嫩者者柳桂。</p>	記載なし	記載なし
B	<p>〈熱性〉</p> <p>肉桂。辛熱、善通血脈、腹痛虛寒、補溫可得。官桂。氣熱、取陽祛寒、除風止汗、溫肝平肝</p> <p>桂枝。梗熱、橫行手臂、止汗舒筋、治手足痺</p> <p>薄者官桂、厚者肉桂、梗者枝（板）桂、每用去粗皮、不宜見火、妊娠忌用、桂枝氣輕、能治傷寒、發熱邪表。官桂氣熱、善於助陽、四肢有寒痰者、非此不行達。肉桂味重、能補命門、通血脈、治一切沈寒冷痛之症、及小兒痘瘡不起、且桂爲木中之主、凡肝邪克土而無火者、用此查效、引火歸源、以爲要藥、性善墜胎動血、每用須防。以本國清化桂爲上品、北客買還北國□州、清化與上黨人參同價</p>	<p>〈溫性〉</p> <p>砂仁。性溫養胃進食、止痛安胎、通經破滯去穀取仁</p>	<p>〈甘性〉</p> <p>人参味甘、大補元氣、止渴生津、調榮養衛。形似人大如鷄腿。</p> <p>參・耆爲退虛火之聖藥、陰虛火動此勿用、景岳曰、陰火不盛者、以參爲君、陰虛火稍盛者、以參爲佐、凡百病垂危、■■參湯爲妙、贊助之功、五參■■。</p>
C	<p>〈火部〉</p> <p>肉桂（附、官桂、桂枝、桂心）。（*補注）</p>	<p>〈土部〉</p> <p>縮砂仁。味辛。性溫無毒。入足太陰、陽明少陰、厥陰亦入於太陰、陽明厥陰、可升可降、升多於降、陽也。</p> <p>[主用] 辛溫香竄、補肺益腎和胃醒脾、快氣調中、通行決滯、霍亂惡心、却腹痛安胎溫脾胃、下冷氣、消宿食、治冷瀉、赤白及休息痢、冷氣奔豚 鬼疰邪疰、轉筋吐瀉、胃氣壅滯丹田虛寒、能溫脾胃、困乏能醒</p> <p>[合用] 與檀香・豆蔻爲使則入肺、與人參・益智爲使則入脾、與黃栢・茯苓爲使則入腎、與赤石脂爲使則入大小腸。</p> <p>[禁用] 性本香、燥走竄、孕婦氣虛者多服反致難產、若肺熱咳嗽氣虛腫滿火熱腹痛血熱胎動竝禁。</p> <p>[製法] 和皮熯火炒、令香熟、去皮取仁、搗碎用。○按砂仁稟天地陽和之氣、以生辛能散能潤、溫能和暢通達、故治一切虛寒凝結氣滯嘔吐胃寒腸滿之症也。</p>	<p>〈金部〉</p> <p>人参。味甘。微寒無毒。味氣均齊、不厚不薄、升多於降 又云微溫、言其功用也。云微寒者言其所稟也 浮而升陽。如欲補五臟當隨本臟藥爲使、升麻爲引、反藜蘆惡鹵鹹。</p> <p>[主用] 益五臟、眞元不足理肺金、虛促短氣瀉心肺脾胃火邪、治傷勞虛火上逆、健脈理中生津止瀉、開心益智、滋補元陽、却驚悸除夢邪腸胃中冷心腹鼓痛胸脇逆滿、破堅積、宣壅滯、除健忘、興陽道、養精神、安魂魄、氣壯而胃自開胃和、而食自化、退虛火之聖藥也。氣虛者固不可遺、血虛者亦不可缺、無陽則陰無以生、而血脫者補氣、氣爲水母也。誠能挽功垂絕、使無形生出有形、多服宣通、少服壅滯</p> <p>[合用] 同苓朮則燥濕、同熟地則滋補、同麥冬則清潤、又云 與黃耆同用則補表、與白朮同用則補中、與熟地同用而佐、以茯苓則助下焦而補腎。</p>

	肉桂	縮砂 (砂仁)	人參
C			[禁用] 形似人形大如鷄腿、去蘆不令人吐、和細辛密封千年不壞、一云 臨用切薄片、銀石中慢火熬汁如入凡散、隔紙微火焙燥、如欲久藏和炒米伴勺同納屏中封固則久藏不壞 且得穀氣之香澤也。按人參得土中、清陽之氣稟、春升少陽之令而生、味甘合五行之正、性溫得四氣之和、狀類人形、上應瑤光、故能回陽氣於垂絕却虛邪於俄頃功魁群草力奪珍丹入脾肺二經諸虛皆調五臟勻補虛人服之如陽春一至萬物發生、猶飢之得食渴之得飲、至於能解酒毒潰癰疽療目疾、咸獲其效則補虛培元之功、更可見矣、若煉膏投服功力更優。韓能回元氣於無何有之、鄉一切產後病、後癰疽出膿後。元氣未復尊爲聖藥。
D	沈・速・檀・桂・龍腦・降眞・琦楠・鬱金・薔薇諸香多產南嶽(徼)。宋范成大云、南方火盛、其氣炎上、萬物所賦、皆味辛而臭香。沈作喆亦云、火盛於南方、實能生土、土味甘而臭香、其在南方乘火之王得其所養、英花發外、是以草木皆香。(30 葉裏～ 31 葉表)	縮砂。出太原鎮。苗類薑子、如白豆蔻(即砂仁)(57 葉裏)	潛確類書、人參生上黨山谷、遼東諸州皆有之不及上黨。陸羽云、人參上者生上黨、中者生百濟・新羅、下者有高麗。今北人多貴遼參、賤黨參。蓋上黨已絕無此、出薊州田家植者、紅白可玩、而淡無味、一兩值三錢。又安布政州芙蓉・先禮等社產人參、四五月間開紫花、採根洗過、略蒸微刮、日晒夜焙、亦有橫紋、與北參宛然無異、味清甘、用以起危篤、生津液益氣、頗有功效。出清化嶺山鄉者其花黃白、味香甘黏力薄不如又安。京北鳳眼亦有。然又安參不甚貴一兩值三四十錢、北參商客帶來氣質全變、而一兩所值每至八十緡、後遂至一百五六十緡、公侯貴戚領賞購之。愚謂此亦厭家鷄而愛野鶩爾。物產之美多出東南窮山際海、皆天地之藏、遼東・高麗・新羅皆極東之地、故產人參、交境驩・順諸州爲極南、沈・速・檀・桂彌滿林麓。其出參也、又何足異必以北方者爲眞、則沈・速・檀・桂亦將更求海外蕃舶之物乎。 西洋參、一種自海舶來、今中國亦尙之。一斤或至銀十兩、曾服此參、殊覺枯澁無味、何益氣力。近杭人著本草從新、因稱其能補肺降火、生津液、除煩、亦爲益美。(57 葉裏～ 59 葉表)
E	<木門> 桂。俗同。有牡桂・菌桂二類。	<草門> 縮砂密。羅紇砂仁。似高良薑、花在根下。	記載なし

補注：本表作成にあたり参照したハノイ国家図書館蔵本『医宗心領』は、Digital collections of the Vietnamese Nôm Preservation Foundation のウェブサイト上 (<https://lib.nomfoundation.org/>) で画像公開されている版本であるが、肉桂の項目が記載されている巻 10 については、別巻が誤載されているため原文を参照することができなかった。ベトナム語訳本 *Hải Thượng Lãn Ông Y Tông Tâm Lĩnh, Quyển I* (Nhà xuất bản Y học, 2005) の当該部分記述を見ると、気味・主用・合用・禁用・製法に加えて按文が記載されているが、他の薬材同様、博物学的情報は見られない。

(資料1)『本草綱目啓蒙』(小野蘭山『本草綱目啓蒙』(東洋文庫)平凡社、1991年)

桂 牡桂 ニッケイノキ [一名] 尉陀生 藥譜 尉陀生 輟耕録 咄者金 光明經

桂ノ字ヲ和名鈔ニ、メガツラト訓ズ。カツラト訓ズルハ桂ノ字ノ古訓ナリ。今城州加茂祭りニ用ル所ノカツラノキトハ別ナリ。コレハ古名、ヲガツラニシテ、漢名詳ナラズ。桂古ハ東京ヲ上品トス。ソノ味甚辛甘ニシテ香氣烈シ。長サ一尺許、細クワリテ木皮ニテツナゲリ。故ニ、トマキ肉桂ト呼。コノ品、今絶エテナシ。交趾ノ肉桂ハ辛味多ケレドモ、ネバリアリ、故ニ古ハ上品トセズ。東京ノ次トス。今藥舖ニ東京ト呼者ハ皆下品ニシテ、本經逢原ニ謂ユル板桂ナルベシ。今ハ上品ノ東京ナキ故、交趾ヲ上品トス。然レドモ交趾ノ真物久シク渡ラズ。古渡モ甚ダ稀ナリ。故ニ今藥舖ニ、広南ノ内ヨリ味辛キモノヲ撰ビ出シテ、交趾ト名ケ売。其肉桂・折桂枝・扁(ヒラ)桂枝・草(ワラ)桂枝等ト名クル者モ、皆広南中ヨリ撰ビ分ツ者ナリ。又紅毛肉桂アリ。形狭クシテ長サ二三尺。粗皮ナクシテ赭黄色、厚キ者ハ味辛ク、薄キ者ハ味淡シ。他桂ノ味ト相反ス。コノ者上品ナレドモ、今少シ。新渡ノ桂ハ皆皮厚シテ味淡シク下品ナリ。方書ニ、肉桂・桂心・官桂・桂枝等ノ名アリ。肉桂ハ本草徵要ニ、乃近根之最厚者ト云。本草約言ニ、在下最厚者曰肉桂。桂心ハ丹溪補遺ニ曰、桂心者皮之肉厚、去其麤厚而無味者、止留近木一層而味辛甘者、故名之曰心、美之之辭也ト云。本草約言ニ、去其麤厚而留近木之味重而最精者、曰桂心ト云。集解・保昇・藏器ノ説モコレニ同シテ可ナリ。雷斅・時珍及本草徵要ノ説ニ、内外ノ皮ヲ去テ心ヲ采ト云ハ非ナリ。桂心、一名、紫桂 藥性要略大全・中桂 脾胃論。官桂ハ正誤中、時珍ノ説可ナリ。丹溪補遺ニ、曰官桂者、桂多品、取其品之高者可以充用而名之、貴之之辭也ト云。然ルニ本草約言ニ桂枝ト薄桂トヲ分ツハ非ナリ。又本經逢原ニ、桂枝是最上枝条、亦名柳桂、言如柳条之嫩小也ト云。本草匯ニハ、桂枝即頂上細枝条、又有一種柳桂、乃桂之嫩小枝条ト云テ、二名ニ分ツ。コノ説時珍ト同シテ佳ナリ。当ニ本草匯ノ説ニ從ヒ、桂枝ト柳桂トヲ分ツベシ。其柳桂ハ草桂枝ナリ。享保年中南京種来リ、今諸州官園ニ甚多ク繁茂ス。コノ種京師花戸ニモ多シ。葉形細長ニシテ三縦道葉ノ末マデ通リタルヲ上トス。下品ノ者ハ葉ノ末ニ枝筋アリテ、三縦道通ラズ。其木四時新葉ヲ生ジテ繁茂シ易シ。コノ皮香氣ハアレドモ辛味少シテ渋ミヲ帶。桂ハ熱地ノ産ニシテ、東京・交趾ハ皆南方ナリ。嶺南桂州ハコノ木アルニ因テ名ク。移シテ嶺北ニ栽レバ氣味殊ニ辛辣少シ。葉ニ入ニ堪ズト、頌ノ説ニ云リ。漢種ヲ本邦ニ植テ味ノ変ズルコト宜ナリ。九州・四国ニハ和産ノ桂アリ。其形状・香味ハ皆漢種ニ同ジ。今天竺桂ノ根皮ヲ采売ル者アリ。香味共ニ良ナリ。然レドモ本草ニ根皮ヲ用ユルコト見ヘズ。

菌桂。

交趾ノ桂ナリ。皆枝皮ニシテ薄ク、二三重卷モノナリ。故ニ卷肉桂ト云。味甚辛シ。ワリ交趾ト呼者ハ、大サ五分許、二ツワリニシテ内ニ脂アリ。今ハ真ノ東京ナシ。故ニ交趾ヲ上品トスレドモ、此品モ久シク渡ラズ。古渡ハ甚稀ナリ。故ニ今藥舖ニ広南ノ内、形相似テ辛味アル者ヲ撰ビ出シテ、交趾肉桂ト名ケ売。古ハ藥舖ニ卷肉桂ヲ誤テ官桂ト云。本經逢原ニ、筒桂俗名官桂ト云ノ誤リニ因ナリ。別ニ草肉桂ト呼アリ。交趾ノクズナリ。今ハ広南ノ中ヨリ撰ビ出ス。

[集解] 時珍ノ説ニ、叢生巖嶺間謂之巖桂、俗呼為木犀ト云ハ、今庭際ニ栽ル所ノ木犀ナリ。俗名ダモ 天竺桂ト同名 トモ云。唐山ニテ詩ニ詠ズル桂花ニシテ、藥用ノ桂ノ類ニ非ズ。葉ハ木蓮(イタビ)ニ似テ、堅ク細鋸葉アリ、冬凋マズ、秋ニ至テ葉

間ニ小花ヲ開ク。色白シ。又黄赤色ノ者アリ。其香遠ク聞テ瑞香花（チンテウケ）ノ如シ。唐山ニハ数品アリ。春花サク者ヲ春桂 物理小識 ト云、四季花サク者ヲ四季桂 秘伝花鏡 ト云、毎月花サク者ヲ月桂 同上 ト云。又紅花ノ者ヲ丹桂 汝南圃史ト云。一名紅桂 同上。

巖桂 一名花仙 事物異名 仙客 典籍便覽 仙友 同上 山友 事物紺珠 天闕清香 巖山圭木 共同上 状元花 名物法言 天香 尺牘双魚 七里香 閩書 鳳尾 同上 九里香 汝南圃史 金粟 品字箋 檜花 通雅

（※続く天竺桂の項目は省略）

（資料2）『本草綱目』卷34（底本：『重訂本草綱目（上・下冊）』文化圖書公司、1994年。光緒11年張紹棠重訂刊本の影印）

木之一（香木類三十五種）

桂 別錄、上品、牡桂 本經、上品（図は省略）

〔釋名〕 榿

音寢。〔時珍曰〕按、范成大桂海志云、凡木葉心皆一縱理、獨桂有兩道如圭形、故字從圭。陸佃埤雅云、桂猶圭也。宣導百藥、為之先聘通使、如執圭之使也。爾雅謂之榿者、能侵害他木也。故呂氏春秋云、桂枝之下無雜木。雷公炮炙論云、桂釘木根、其木即死、是也。桂即牡桂之厚而辛烈者、牡桂即桂之薄而味淡者、別錄不當重出。今並為一。而分目于下。

〔集解〕〔別錄曰〕桂生桂陽、牡桂生南海山谷。二月、八月、十月采皮、陰乾。〔弘景曰〕南海即是廣州。神農本經、惟有牡桂、菌桂。俗用牡桂、扁廣殊薄、皮黃、脂肉甚少、氣如木蘭、味亦類桂、不知是別樹、是桂之老宿者。菌桂正圓如竹、三重者良、俗中不見、惟以嫩枝破卷成圓者用之、非真菌桂也、並宜研訪。今俗又以半卷多脂者、單名為桂、入藥最多、是桂有三種矣。此桂廣州出者好、交州・桂州者、形段小而多脂肉、亦好、湘州・始興・桂陽縣者、即是小桂、不如廣州者。經云、桂、葉如柏葉、澤黑、皮黃心赤。齊武帝時、湘州送樹、植芳林苑中。今東山有桂皮、氣粗相類、而葉華異、亦能凌冬、恐是牡桂。人多呼為丹桂、正謂皮赤爾。北方重此、每食輒須之、蓋禮所云、薑桂以為芬芳也。〔恭曰〕桂惟有二種。陶氏引經云、似柏葉、不知此言從何所出。又於別錄剩出桂條、為深誤也。單名桂者、即是牡桂、乃爾雅所謂榿木桂也。葉長尺許、花子皆與菌桂同。大小枝皮俱名牡桂。但大枝皮肉理粗、虛如木而肉少味薄、名曰木桂、亦云大桂。不及小嫩枝皮肉多而半卷、中心皺起、其味辛美、一名肉桂、亦名桂枝、一名桂心。出融州・桂州・交州甚良。其菌桂、葉似柿葉、中有縱文三道、表裏無毛而光澤。肌理緊薄如竹、大枝・小枝皮俱是筒。其大枝無肉、老皮堅版、不能重卷、味極淡薄、不入藥用。小枝薄而卷、及二三重者良。或名筒桂、陶云小桂是也。今惟出韶州。〔保昇曰〕桂有三種、菌桂、葉似柿葉、而尖狹光淨。花白蕊黃、四月開、五月結實。樹皮青黃、薄卷若筒、亦名筒桂。其厚硬味薄者、名版桂、不入藥用。牡桂、葉似枇杷葉、狹長於菌桂葉一二倍。其嫩枝皮半卷多紫、而肉中皺起、肌理虛軟、謂之桂枝、又名肉桂。削去上皮、名曰桂心。其厚者名曰木桂。藥中以此為善。陶氏言半卷多脂者為佳。又引仙經云、葉似柏葉。此則桂有三種明矣。陶雖是梁武帝時人、實生於宋孝武建元三年、歷齊為諸王侍讀、曾見芳林苑所植之樹、蘇恭只知有二種、指陶為誤、何臆斷之甚也。〔藏器曰〕菌桂・牡桂・桂心三色、同是一物。桂林桂嶺、因桂得名、今之所生、不離此郡。從嶺以南、際海盡有桂樹、惟柳・象州最多。味既辛烈、皮又厚堅。厚者必嫩、薄者必老。采者以老薄為一色、嫩厚為一色。嫩既辛烈、兼又筒卷。老必味淡、自然版薄。薄者即牡桂、卷者即菌桂也。桂心即是削除皮上甲錯、取其近理（裡）而有味者。〔承曰〕諸家所說、幾不可考。今廣・交商人所販、及醫家見用、惟陳藏器一說最近之。〔頌曰〕爾雅但言榿木桂一種。本草載桂及牡桂・菌桂三種、今嶺表所出、則有筒桂・肉桂・桂心・官桂・板桂之名、而醫家用之、罕有分別。舊說菌桂正圓如竹、有二三重者、則今之筒桂也。牡桂皮薄色黃、少脂肉者、則今之官桂也。桂皮半卷多脂者、則今之板桂也。而今觀賓・宜・韶・欽諸州所圖上者、種類亦各不同、然總謂之桂、無復別名。參考舊注、謂菌桂、葉似柿、中有三道文、肌理緊薄如竹、大小皆成筒、與今賓州所出者相類。牡桂、葉狹於菌桂、而長數倍、其嫩枝皮半卷多紫、與今宜州・韶州所出者相類。彼土人謂其皮為木蘭皮、肉為桂心。此又有黃紫兩色、益可驗也。桂葉如柏葉而澤、皮黃心赤。

與今欽州所出者、葉密而細、恐是其類。但不作柏葉形為異爾。蘇恭以單桂・牡桂為一物、亦未可據。其本俱高三四丈、多生深山巒洞中、人家園圃亦有種者。移植於嶺北、則氣味殊少辛辣、不堪入藥也。三月四月生花、全類茱萸。九月結實、今人多以裝綴花果作筵具。其葉甚香、可用作飲尤佳。二月八月採皮、九月採花、並陰乾、不可近火。〔時珍曰〕桂有數種、以今參訪、牡桂、葉長如枇杷葉、堅硬有毛及鋸齒、其花白色、其皮多脂。菌桂、葉如柿葉、而尖狹光淨、有三縱紋而無鋸齒、其花有黃有白、其皮薄而卷。今商人所貨皆此二桂。但以卷者為菌桂、半卷及板者為牡桂、即自明白。蘇恭所說、正合醫家見今用者。陳藏器・陳承斷菌・牡為一物者、非矣。陶弘景復以單字桂為葉似柏者、亦非也。柏葉之桂、乃服食家所云、非此治病之桂也。蘇頌所說稍明、亦不當以欽州者為單字之桂也。按尸子云、春花秋英曰桂。嵇含南方草木狀云、桂生合浦・交趾、生必高山之巔、冬夏常青。其類自為林、更無雜樹。有三種、皮赤者為丹桂、葉似柿葉者為菌桂、葉似枇杷葉者為牡桂。其說甚明、足破諸家之辯矣。又有巖桂、乃菌桂之類、詳菌桂下。韓終采藥詩云、暗河之桂、實大如棗、得而食之、後天而老。此又一種也。暗河不知在何處。

〔正誤〕〔好古曰〕寇氏衍義言、官桂不知緣何立名。予考圖經、今觀・賓・宜諸州出者佳。世人以觀字畫多、故寫作官也。〔時珍曰〕此誤。圖經今觀乃今視之意、嶺南無觀州。曰官桂者、乃上等供官之桂也。

桂 別錄、〔時珍曰〕此即肉桂也。厚而辛烈、去粗皮用。其去內外皮者、即為桂心

〔氣味〕甘辛、大熱、有小毒。〔權曰〕桂心苦辛、無毒。〔元素曰〕肉桂氣熱、味大辛、純陽也。〔杲曰〕桂辛熱有毒、陽中之陽、浮也。氣之薄者、桂枝也。氣之厚者、桂肉也。氣薄則發泄、桂枝上行而發表、氣厚則發熱、桂肉下行而補腎。此天地親上親下之道也。〔好古曰〕桂枝入足太陽經、桂心入手少陰經血分、桂肉入足少陰・太陰經血分。細薄者為枝為嫩、厚脂者為肉為老。去其皮與裏、當其中者為桂心。別錄言、有小毒。又云、久服神仙不老。雖有小毒、亦從類化。與黃芩・黃連為使、小毒何施。與烏頭・附子為使、全取其熱性而已。與巴豆・縮砂・乾漆・穿山甲・水蛭等同用、則小毒化為大毒。與人參・麥門冬・甘草同用、則調中益氣、便可久服也。〔之才曰〕桂得人參・甘草・麥門冬・大黃・黃芩、調中益氣。得柴胡・紫石英・乾地黃、療吐逆。忌生蔥・石脂。

〔主治〕利肝肺氣、心腹寒熱冷疾、霍亂轉筋、頭痛腰痛、出汗止煩止唾、咳嗽鼻鼈、墮胎、溫中、堅筋骨、通血脈、理疏不足、宣導百藥、無所畏。久服、神仙不老 別錄。補下焦不足、治沉寒痼冷之病、滲泄止渴、去營衛中風寒、表虛自汗。春夏為禁藥、秋冬下部腹痛、非此不能止 元素。補命門不足、益火消陰 好古。治寒痺風瘡、陰盛失血、瀉痢驚癇 時珍。

桂心 藥性論。〔敷曰〕用紫色厚者、去上粗皮並內薄皮、取心中味辛者用。中土只有桂草、以煮丹陽木皮偽充桂心也。〔時珍曰〕按西陽雜俎云、丹陽山中有山桂、葉如麻、開細黃花。此即雷氏所謂丹陽木皮。

〔氣味〕苦辛、無毒。詳前桂下。

〔主治〕九種心痛、腹內冷氣痛不可忍、欬逆結氣、壅痺腳痺不仁、止下痢、殺三蟲、治鼻中瘻肉、破血、通利月閉、胞衣不下 甄權。治一切風氣、補五勞七傷、通九竅、利關節、益精明目、暖腰膝、治風痺骨節攣縮、續筋骨、生肌肉、消瘀血、破疔癰癥瘕、殺草木毒 大明。治風僻失音喉痺、陽虛失血、內托癰疽痘瘡、能引血化汗化膿、解蛇蝮毒 時珍。

牡桂 本經。〔時珍曰〕此即木桂也。薄而味淡、去粗皮用。其最薄者為桂枝、枝之嫩小者為柳桂。

〔氣味〕辛溫、無毒。〔權曰〕甘辛。〔元素曰〕桂枝味辛甘、氣微熱、氣味俱薄、體輕而上行、浮而升、陽也。余見前單桂下。

〔主治〕上氣欬逆結氣、喉痺吐吸、利關節、補中益氣。久服通神、輕身不老 本經。心痛脇痛脇風、溫筋通脈、止煩出汗 別錄。去冷風疼痛 甄權。去傷風頭痛、開腠理、解表發汗、去皮膚風濕 元素。泄奔豚、散下焦畜血、利肺氣 成無己。橫行手臂、治痛風 震亨。

〔發明〕〔宗奭曰〕桂甘辛、大熱。素問云、辛甘發散為陽。故漢張仲景桂枝湯治傷寒表虛、皆須此

藥、正合辛甘發散之意。本草三種之桂、不用牡桂・菌桂者、此二種性止於溫、不可以治風寒之病也。然本經止言桂。仲景又言桂枝者、取枝上皮的也。好古曰、或問本草言桂能止煩出汗、而張仲景治傷寒有當發汗、凡數處、皆用桂枝湯。又云無汗不得服桂枝、汗家不得重發汗、若用桂枝是重發其汗。汗多用桂枝甘草湯、此又用桂枝閉汗也。一藥二用、與本草之義相通否乎。曰、本草言桂辛甘大熱、能宣導百藥、通血脈、止煩出汗、是調其血而汗自出也。仲景云、太陽中風、陰弱者、汗自出。衛實營虛、故發熱汗出。又云、太陽病發熱汗出者、此為營弱衛強、陰虛陽必湊之、故皆用桂枝發其汗。此乃調其營氣、則衛氣自和、風邪無所容、遂自汗而解。非桂枝能開腠理、發出其汗也。汗多用桂枝者、以之調和營衛、則邪從汗出而汗自止、非桂枝能閉汗孔也。昧者不知出汗閉汗之意、遇傷寒無汗者亦用桂枝、誤之甚矣。桂枝湯下發汗字、當認作出字、汗自然發出、非若麻黃能開腠理、發出其汗也。其治虛汗、亦當逆察其意可也。〔成無己曰〕桂枝本為解肌。若太陽中風、腠理致密、營衛邪實、津液禁固、其脈浮緊、發熱汗不出者、不可與此必也。皮膚疎泄、自汗、脈浮緩、風邪干於衛氣者、乃可投之。發散以辛甘為主、桂枝辛熱、故以為君。而以芍藥為臣、甘草為佐者、風淫所勝、平以辛苦、以甘緩之、以酸收之也。以薑・棗為使者、辛甘能發散、而又用其行脾胃之津液、而和營衛、不專於發散也。故麻黃湯不用薑・棗、專於發汗、不待行其津液也。〔承曰〕凡桂之厚實氣味重者、宜入治水臟及下焦藥、輕薄氣味淡者、宜入治頭目發散藥。故本經以菌桂養精神、牡桂利關節。仲景發汗用桂枝、乃枝條、非身幹也、取其輕薄能發散。又有一種柳桂、乃桂之嫩小枝條、尤宜入上焦藥用。〔時珍曰〕麻黃遍徹皮毛、故專於發汗、而寒邪散、肺主皮毛、辛走肺也。桂枝透達營衛、故能解肌而風邪去、脾主營肺主衛、甘走脾、辛走肺也。肉桂下行、導火之原、此東垣所謂腎苦燥、急食辛以潤之、開腠理、致津液、通其氣者也。聖惠方言、桂心入心、引血化汗化膿。蓋手少陰君火、厥陰相火、與命門同氣者也。別錄云、桂通血脈是矣。曾世榮言、小兒驚風及泄瀉、並宜用五苓散、以瀉丙火滲土濕。內有桂、能抑肝風而扶脾土。又醫余錄云、有人患赤眼腫痛、脾虛不能飲食、肝脈盛、脾脈弱。用涼藥治肝則脾愈虛、用暖藥治脾則肝愈盛。但於溫平藥中倍加肉桂、殺肝而益脾、故一治兩得之。傳云、木得桂而枯是也。此皆與別錄桂利肝肺氣、牡桂治脇痛脇風之義相符。人所不知者、今為拈出。又桂性辛散、能通子宮而破血、故別錄言其墮胎、龐安時乃云、炒過則不損胎也。又丁香・官桂治痘瘡灰塌、能溫托化膿。詳見丁香下。

〔附方〕（省略）

（※続く菌桂・天竺桂の項目は省略）

（資料3）『東宝医鑑』湯液篇卷3（嘉慶19年重刊本、早稲田大学図書館蔵）

木部

（唐）桂皮

性大熱、味甘辛、有小毒。主溫中通血脈、利肝肺氣、治霍亂轉筋。宣導百藥、無所畏。能墮胎。○桂得葱而軟葱液、可熬桂作水。○生南方、三月四月生花、全類茱萸。九月結實、二月八月十月採皮陰乾凡使刮去麤皮 本草

桂心。治九種、心痛殺三蟲破血止腹內冷痛治一切風氣補五勞七傷通九竅利關節益精明目煖腰膝除風痺破疔癰瘰癧消瘀血續筋骨生肌肉下胞衣○即是削除皮上甲錯處取近裏辛而有味桂皮一斤只得五兩正 本草

肉桂。能補腎宜入治藏及下焦藥入手足少陰經色紫而厚者佳刮去麤皮用 入門

桂枝。枝者枝條非身幹也、蓋取其枝上皮的取其輕薄而能發散正合內經辛甘發散為陽之義○入足太陽經能散血分寒邪 本草 ○表虛自汗以桂枝發其邪衛和則表密汗自止非桂枝能收汗也 丹心 ○仲景用桂枝發表肉桂補腎本乎天者親上本乎地者親下自然之理也 湯液。

柳桂。乃小枝嫩條善行上焦補陽氣薄桂乃細薄嫩枝入上焦橫行肩臂 入門 ○桂心・菌桂・牡桂同是一物厚者必嫩薄者必老嫩既辛香兼又筒卷老必味淡自然板薄板薄者即牡桂也。筒卷者即菌桂也、筒厚者宜入治藏及下焦藥輕薄者宜入治頭目發散藥、又有柳桂乃桂之嫩小枝尤宜入治上焦藥 本草